

## 森春濤年譜

陳文佳

### まえがき

森春濤の年譜はこれまで三種類作成されている。昭和六十三年、一宮市博物館編集『森春濤とゆかりの詩人展』中の「森春濤年譜」、平成十四年同博物館編集『明治の文雅——森春濤をめぐる漢詩人たち』中の「関係略年譜」、また平成二十五年汲古書院刊行、日野俊彦著『森春濤の基礎的研究』の附録「春濤略年譜及び『春濤詩鈔』詩題一覽」である。同博物館が編集した二種類の年譜は展覽會のパンフレット用で、簡単に春濤の生涯を紹介したものである。また日野氏の『春濤詩鈔』詩題一覽は極めて詳細なものだが、年譜のほうは簡潔に記されるに止まる。春濤研究を進めていく上では、生涯の事跡と漢詩の創作活動を関連させつつ網羅的に編修されたものが不可欠である。それが今回年譜を作成した理由である。

文政二年(1819) 己卯 一歳

四月二日 森春濤一宮村下馬町に生まれる。『一宮市史』第十二編「文藝」第一章「漢文學」…

「文政二年四月二日一宮に生まれた。父は森左膳(元治元年歿、歳七十九)、一鳥と號し、實は花池(中島郡大和村大字)森儀兵衛の男で、一宮森左元の家へ養嗣し、下馬町(公本町通五丁目)西側に住し醫を業としたので、春濤も亦これに従った。」  
佐藤牧山、昌平黌に學ぶ。

文政八年(1825) 乙酉 七歳

十一月八日 鷺津毅堂生まれる。

文政九年(1826) 丙戌 八歳

春濤の弟、一鳥の三男利一郎生まれる。

文政二年(1819) 己丑 十一歳

岐阜の眼科醫中川氏に預けられる。この間漢詩に熟中。『一宮市史』第十二編「文藝」第

一章「漢文學」…「文政十二年十一歳頃岐阜の眼科醫中川氏(花池森儀兵衛の弟、中川

へ養子す)に預けられ、醫術を學ばしめたが喜ばず、徒らに淨琉璃戲曲の稽古にのみ心醉

して本業を顧みないので、中川氏痛く叱責してこれを嚴禁し、代ふるに幼學詩韻一部を與

へて讀ましめたが、天稟の才あつてよくこれを了得し、盛に名吟を示すに至つた。」

大沼枕山、丹羽村に來て萬松亭(1825)年に有隣舎に改稱に學ぶ。

天保四年(1833) 癸巳 十五歳

岐阜に遊ぶ。「岐阜竹枝」二首(三月作)、「新秋夜望」、「常在寺訪山澤上人」を詠う。

案するに常在寺は、岐阜縣岐阜市にある日蓮宗京都妙覺寺の舊末寺である。正式名は鷺林

山常在寺。

天保六年(1835) 乙未 十七歳

七月一宮に歸る。萬松亭に通う。この頃、萬松亭で枕山と出會う。『一宮市史』第十二編

「文藝」第一章「漢文學」…天保六年一宮に歸り、丹羽村(丹羽郡西成村大字鷺津益齋

に就いて専ら漢學を學んだが、當時鷺津家の姻族なる大沼捨吉(幽林の孫、後の沈山が

寄寓して居たので、時に春濤十七歳、沈山十八歳、共に鑽研し甲唱乙和、よく逸話をさへ

遺した。」

九月蟹江村に行き眼科醫を開業。枕山、江戸に歸る。

天保一〇年(1839) 己亥 廿一歳

正月一宮に歸る。「人日歸家」四首、「歸後内集」一首などを詠う。

天保十一年(1840) 庚子 廿二歳

三月「春天」、「春雲」、「春雨」、「春雪」、「春月」、「春風」、「春寒」、「春城」、

「春郊」、「春苔」、「春草」、「春雁」、「春蝶」、「春鶯」、「春燕」、「春愁」、

「春夢」、「春柳」など合計二十八首の春をテーマにした七言律詩を詠う。『一宮市史』

第十二編「文藝」第一章「漢文學」…「同十一年の交、春濤一宮の邸にあつて人日草堂集・

松雨莊人集成り、以て當地の風物を四方に紹介するを得たのは、郷土として大に感謝すべ

きである。」

九月十五日鷺津益齋ら、春濤宅を訪れる。春濤「九月十五日益齋先生拉士廉諸子見臨」を

詠う。

十月大赤見村の服部牧山宅で鷺津益齋、森春濤ら八名による不休社同人の詩宴が開かれ、

『種徳堂宴集』を編む。春濤「十月八日裁松寺小集分韻得十蒸」を詠う。案するに裁松寺

は丹羽郡大赤見村(今一宮市大赤見)にある。

『星巖絶句』刊。

天保十二年(1841) 壬寅 廿四歳

十月 丹羽郡大赤見村裁松寺で鷺津益齋らと集會し、「十月八日裁松寺例集 益齋先生有詩、即次韻」一首を詠う。

冬 鷺津益齋死去。享年二十九。春濤「哭益齋先生」二首を詠う。

天保十四年(1843) 癸卯 廿五歳

春 梁山星巖、春濤宅を訪れる。春濤「巖師見訪」一首を詠う。

後、名古屋に遊ぶ。「名古屋客舎 與雲州對酌」を詠う。

冬 春濤の弟、一鳥の三男利一郎没。享年十七。春濤「哭弟磯」、「奇妹」を詠う。「哭弟磯」自註「弟病中書寫『法華經』、到半而歿。」

年末 岐阜に遊ぶ。「重遊岐阜有感而作」を詠う。

弘化元年(1844) 甲辰 廿六歳

三月まで岐阜を遊歴。「藍川旗亭送宮野生之伊勢」、「三日江上所見」、「嬉春絶句」などを詠う。「藍川」は岐阜の長良川の雅稱。

四月 名古屋に遊歴。「甲辰四月二日名古屋客中作」、「讀元遺山集」などを詠う。

弘化二年(1845) 乙巳 廿七歳

大赤見村の服部天都子をめとる。佐藤寛『春濤先生逸事談』…「雪香女史は、同里なる服

部市五郎の女にして、初の名を起美子と呼ばれしが、先生にかしづかれしより、天都子と

なんあらためられる。才徳兼ね備はりて、をさをさ吟詠の路にも暗かざりければ、そが片言隻辭も當時には傳誦せられきといふ。集一卷あり、題して小梅粧閣集といへり。そが

中に、「殘螢一點雨蕭蕭、小鴨香消愁未消。惆悵紅顏秋易老、夜風吹破美人蕉。」といふ一絶あり。物すこく心ぼそき有様、まのあたりに見たらんが如し。」

弘化四年(1847) 丁未 廿九歳

春 長男森真堂生まれる。

『春濤詩鈔』卷五の卷末「自甲辰至丁未、舊稟全逸、今補綴之、名曰『零蟬落雁集』」。

嘉永元年(1848) 戊申 三十歳

秋 「秋雨」、「秋晴」、「秋山」、「秋水」、「秋柳」、「秋草」、「題畫回文」、「落葉」など七首の秋をテーマにした詩を詠う。

嘉永三年(1850) 庚戌 三十二歳

秋 西遊。京都にて梁山星巖の門に入る。「謁星巖先生率賦呈政」を詠う。また京都・大阪・

兵庫遊歴中、「途上所見」、「湖山秋晴」、「澗上偶詠」、「呈小竹先生」、「夜發浪華赴兵庫舟中口示子勤弟」、「楠公墓」、「至日」などの詩を詠う。

嘉永四年(1831) 辛亥 三十二歳

四月 藤本鐵石と旗橋に別れる。「旗橋村店送鐵石山人遊美濃」一首を詠う。

夏 江戸に枕山を訪ね、小野湖山、遠山雲如、鱸松塘らと交わる。遊歴中、「題千村公岫山五勝」五首、「觀潮阪」、「雨中登清見寺」、「風雨踰函嶺」、「納涼聞笛」、「送雲如山人遊伊香保」、「發江戸留別枕山樂山晚崧諸君」などを詠う。  
鱸松塘(1823~1898)『松塘詩鈔』刊。

嘉永五年(1832) 壬子 三十四歳

江馬細香と唱和する。「贈細香女史」一首を詠う。

十二月 春濤幼子夭折。「悼兒」一首を詠う。「梅前菊後百餘日、纔向人間過一生」の二句ある。詩の自註:「以九月十二日生、以臘月廿六日死。」この幼子について、「森家先祖代代靈簿寫」、「明治十四年巳四月伺扣 森春濤家縁記」、「森家墓誌」などに記載がない。恐らく早くに夭折したためであろう。

嘉永六年(1833) 癸丑 三十五歳

三月 「蘭亭集字詩并序」五律十首を詠う。詩序:「壬子軍蘭亭禊事在昏永和九年癸丑之歳、距今千五百年。癸丑二十五周、而今茲嘉永六年也。乃以三月三日會諸賢於草堂、修禊賦詩、聊復踐蘭亭芳躅也。予偶集其記中字、賦五律半百首以紀事。王曰:「後之視今、亦猶今之視昔。」予每臨此文、未嘗無今昔之感。是此詩之所以作也。後之誦此詩者、亦自

知予今日之興會耳。噫。」

嘉永七年(1834) 甲寅 三十六歳

三月 吉田松陰、金子重輔の二人海外密航を企てて成らず自首して幕吏に捕わる。  
四月 春濤「生日自嘲」詠う。「三十六年田舎醫、雖然迂拙是男兒。振衣擬學山中相、一家無祿可辭」という。六日 佐久間象山・松陰に連座教唆の罪で傳馬町獄入り。  
近藤子正、春濤宅を訪れる。春濤「五日貧甚、近藤子正偶至」を詠う。  
七月廿六日 春濤祖父森左元没。

安政二年(1845) 乙卯 三十七歳

春 「自書雜題」七首を詠う。  
十月十五日 藤本鐵石(1816~1863)、一宮に春濤を訪ねる。春濤「十月望日藤本鐵石見過」を詠う。  
冬 藤本鐵石、京に遊ぶ。春濤「送藤本鑄公遊京師」を詠う。

安政三年(1846) 丙辰 三十八歳

春 吉田蘇川宅を訪れる。「吉田蘇川宅觀藤花」一首を詠う。  
京に出て星巖間に入る。頼支峰・三樹三郎兄弟、家里松嶺、池内陶所らと交わる。  
十二月 妻天都子没。春濤「悼亡」四首を詠う。

安政四年(1857) 丁巳三十九歳

一月「丁巳新年偶成」を詠う。詩の自註「去年元旦、内子有句云、「小院東風梅影嫵、半簾紅日鳥聲妍」。」また、「梅花」、「無題」、「刻意」、「春寒」、「魂」などの詩を詠い、亡き妻への哀悼の意を表す。

春家里松疇編『安政三十六家絶句』刊。

秋 春濤著髮。鷺津益齋の墓に謁する。「謁鷺津先師墓 寄懷毅堂在江戸」を詠う。後、美濃遊歴中の齋藤拙堂(1797~1865)に会いに行く。「聞拙堂翁遊美濃、往而訪之、翁見示谿山琴興詩、因次其韻賦呈」一首、「再訪拙堂翁于笠松旗亭、疊前韻賦呈」二首、「著髮呈拙堂」一首を詠う。丹南藩士森余山と交遊する。「秋夜讀爾詩、同森余山賦」、「余山將歸、賦此贈別」を詠う。また、淡路・飛騨・越前遊歴中の遠山雲如に七律六首を贈る。

冬「梁先生髯翁詩略題辭」四首を詠う。十二月 服部氏の一周忌の法事を行う。「十二月十四日先室小祥忌」を詠う。

安政五年(1858) 戊午 四十歳

八月 戊午の密勅が下される。

九月 安政の大獄が始まる。近藤茂左衛門・梅田雲浜・橋本左内らが逮捕され、江戸傳馬町の獄などで詮議を受けた後、切腹・死罪など酷刑に處せられた。幕閣でも川路聖謨や岩瀬忠震らの非門閥の開明派幕臣が處罰され、謹慎などの處分となった。

九月四日 梁川星巖(1789~1868)コレラにより死亡。享年七十。星巖は安政の大獄の捕縛對象者となったが、その直前に亡くなったから、「死(詩)に上手」と評された。

春濤「秋柳四首用王漁洋韻」、また「疊韻」四首を詠う。

安政六年(1859) 己未 四十一歳

春 村瀬氏娘(逸子)を後室とする。「村瀬氏過期不嫁、聞其意欲得書生如余者、即聘為繼室」を詠う。

僧桂園、春濤宅を訪れる。春濤「僧桂園自京師到、見示宇田栗園近作、即次其韻誌別」、  
「寄懷大沼枕山」、「七十老翁何所求、追憶星巖翁」三首を詠う。

成島柳北、『柳橋新誌』初編を執筆。

安政七年、萬延元年(1860) 庚申 四十二歳

三月三日 幕府大老井伊直弼、櫻田門外で暗殺される。

三月六日 長男真堂天逝(1855)。春濤「哭兒真」二首、「小游仙效曹唐」十六首を詠う。

『一宮市史』第十一編「文藝」第一章「漢文學」…「森真堂、名は一郎、又崑、字は大木、螢窗と號し、森春濤の長子で、母は先室服部氏鐵子である。幼より父に従て詩を學び、學界の麒麟兒として大に矚目せられ、新選名家絶句・近世詩林等にその作品を採録されたが、安政七(萬延元)年三月六日病で歿した。時に歳十四。父春濤は哭兒真二首を賦してその天才を惜んだ。市内四ツ峰墓地に葬り、今時市營墓地に移した。碑銘は螢窓學童之墓とあ

る。〔佐分清因日記、碑銘〕

四月、梁川紅蘭、上洛し川端丸太町の舊宅に開塾。

春濤、『春濤批評』三冊を執筆。

### 萬延二年、文久元年(86) 辛酉 四十三歳

二月 次男普之助生まれる(後に桑名の村田家の養子になる)。春濤「辛酉二月十二日舉兒紀喜」二首を詠う。

春 「懷人絶句」四首を詠い、齋藤拙堂・家里松嶺・河野秀野・廣瀬旭莊など四人に一首ずつ贈る。

秋 「秋詞」七首(「秋山」、「秋水」、「秋曉」、「秋夜」、「秋月」、「秋陰」、「秋

夢)を詠う。友人の蘇川墨菊、長崎で死ぬ。春濤「題亡友蘇川墨菊」を詠う。

十二月廿三日 妻村瀨氏没。「悼亡四首」を詠う。

『近世名家詩鈔』刊行。

### 文久二年(88) 壬戌 四十四歳

三月から七月初めまで高山に遊ぶ。出發前、「壬戌三月將遊飛驒留別」を詠う。

岐阜の女流歌人國島清の近作を求む。「閨秀國島氏善和歌、予介人乞近詠、得其暮春詠杜

若一章、乃賦二十八字以謝」を詠う。『岐阜市史』第五章「文化」第一節「文藝」…「美

濃國稻葉郡古市場村(今の岐阜市黒野古市場)に、國島清子がいた。土地の人が大國島と

呼んでいた財産家國島治右衛門の三女で名は勢以(また清とも書き、清子は通稱)、天保

四年(一八三三)の生まれである。幼時に烈しい天然痘にかかって容貌が醜かったので、

自分から結婚をあきらめて、邸内の離れに起居して、漢學を桑名の富廣蔭に、和歌を京都

の熊谷直兄に學んでいた。當時勤王が佐幕かの論議がやかましく、清子は早くから勤王の

説を主張して、詠歌の中にもその心を現していた。またひそかに志士との往復があり、藤

本鐵石・頼三樹らの諸士と交遊していたという。萬延元年(一八六〇)三月江戸櫻田門外

の變のあと、次のような歌を詠じた。

障る雲消ゆと見し間に月は入りて残る夜くらし武蔵野の原

…そのころの春濤は、尾張一宮を経て岐阜に往来して作詩の指導をしていたが、折も折

も「障る雲」の歌を耳にして、大いに悲涼の趣があるとして、もてはやしやまず人を介し

て近詠を求めて来た。それに應えて清子は「雨後杜若」一首を詠んだ。

雨晴るゝ淺澤水のかきつはた初花咲り葉かくれにして

遊歴中、「高山竹枝」四十首を詠う。

八月 「予將娶國島氏、賦此贈某」を詠う。

九月 國島清を娶る。「九月某日娶國島氏為繼室」を詠う。

『文久二十六家絶句』刊、春濤の作品収載。

### 文久三年(89) 癸亥 四十五歳

春 御望村犬塚に郷綱川を訪う。「訪郷綱川、次其見贈韻」一首を詠う。綱川、名は實善、

通称元之進、晩年隠居して餘齋と號す。詩を星巖翁に問う。詩集『網川遺稿』あり。

星巖の未亡人、紅蘭(804~1979)に「紅蘭張氏谿山雪景」題畫詩一首を贈る。

五月、醫業をやめ名古屋に移り「桑三吟社」を開く。「癸亥夏五、僦居於城南桑名街第三坊、徙而居焉、扁曰桑三軒、亦桑下三宿之意云」四首を詠う。第四首の自註「宅係醫員某故宅」。

五月十九日 家里松嶺、暗殺される。

八月十七日 鐵石、松本圭堂ら大和に擧兵。

十一月十六日 春濤三男泰二郎(後の槐南)生まれる。春濤「十一月十六日擧兒」二首を詠う。また、癸卯(天保十四年、1833)の舊稿を整理。「整理癸卯詩稟 有感書後」一首を詠う。自註「是歲余甫二十五、閏在九月。」

永坂石球(845~1924)と交遊する。「寒夜永坂石球招飲、分韻書即事」を詠う。石球の名は周、字は希壯、通稱は周二・徳彰、石球はその號、別號は玉池星舫夢樓斜庵・又一桂堂など。名古屋の人。家は代代醫者で、石球も醫を業とした。少時から詩文を好み、春濤、鷺津毅堂について學んだ。のちに森春濤門四天王の一人になる。

『星巖先生遺稿』刊。

#### 文久四年、元治元年(864) 甲子 四十六歳

夏 衣浦灣に遊ぶ。「衣浦權歌」十首を詠う。

七月十九日 禁門の變が起る。前年の八月十八日の政變により京都を追放されていた長州

藩勢力が、會津藩主・京都守護職松平容保らの排除を目指して擧兵し、都内において市街戦を繰り廣げ、戦火により約三萬戸が焼失するなど、太平の世を揺るがす大事件。春濤「甲子七月念一夕聞京中十九日之變、感激不寐、詩以紀事」一首を詠う。

九月四日 春濤父森左膳没。享年七十六。

#### 慶應元年(865) 乙丑 四十七歳

九月 笹島に遊ぶ。「九月二十五日田宮總裁拉予及太乙、立齋、可異諸子游笹島、分韻得吾字」一首を詠う。また、知多郡横須賀、久米村に遊ぶ。「舟抵横須賀」、「久米村途上」、「海莊晚晴」などを詠う。

十一月 毅堂、尾張藩に仕え名古屋に歸る。「毅堂先輩應聘就國、有錦旋八律見示、乃次其韻以贈」八首を詠う。

#### 慶應二年(866) 丙寅 四十八歳

七月 藤井竹外(807~1866)没。竹外、名は啓。字は士開、強哉。通稱は啓治郎、吉郎。號は竹外、雨香仙史。攝津高槻藩藩士藤井貞綱の長男。詩は早く頼山陽に従って學び、山陽没後は梁川星巖に兄事した。七言絶句をもつとも得意とし、「絶句竹外」と稱された。詩集に「竹外二十八字詩」、「竹外亭百絶」などがある。春濤「聞竹外訃、作一絶句寄哭」を詠う。

九月 越前に遊ぶ。「丙寅九月將游越前、留別城中諸子」七律五首を詠う。岐阜で妻國島氏

の弟の宅に宿る。「岐阜」、「古市場村投内弟國島雅直宅」などを詠う。旅中、妻に「寄内」(并引)、「寄内三疊韻」、「疊韻寄内」などを贈る。また、「雪達摩」、「雪美人」、「雪馬」、「雪兔」、「雪夜歸舟和廣瀬江村」、「雪日窗體」など越前の風物詩を詠う。春濤著『高山竹枝』出版(名古屋奎文閣刊)。巻首に永坂石埭の序あり、巻末に春濤の跋文ある。

十二月 福井に着く。「福井城下作」、「酒間贈大島怡齋」、「孝顯寺寓居、與張南村夜話、用東坡定惠院韻」などを詠う。廿六日三國港に着く。「臘月念六日雨中、舟下羽水抵三國港」を詠う。

### 慶應三年(1867) 丁卯 四十九歳

一月至二月 「三國港竹枝」五十首を詠う。春濤没後の明治三十八年(1905)、單行本出版。  
三月 福井で桃を観る。「三日福井城下看桃有感、作短歌」一首、「看桃詞」十首、「水樓看桃」二首を詠う。『春濤詩鈔』卷七『桃花流水集』の題注「丁卯三月。是歲三月中浣以後詩全軼。」

五月 毅堂、明倫堂督學となる。

十月 大政奉還。

十二月九日 維新發令。

### 明治元年(1868) 戊辰 五十歳

一月三日 王政復古の大号令が發令。

一月二十五日 戊辰戦争が始まる。春濤「維時」、「從駕北征、時予為本營斥候」、「戊辰重傷」、「又用蘇老泉韻、寄某在越後軍營」などの時事詩を詠う。

三月 藩校明倫堂詩文會評掛になる。

七月 江戸を東京と改め。

九月 明治と改元。

十月 森春濤編『銅碗龍吟』刊行。豊原堂刻。巻首に春濤の自序あり、巻末に永坂石埭の後序ある。

小野湖山、豊橋藩藩校時習館督學となる。

### 明治二年(1869) 己巳 五十一歳

三月 東京遷都。春濤、丹羽花南と唱和する。「次丹羽花南韻」、「次花南韻」を詠う。

六月 版籍奉還。大沼枕山編『東京詞』刊行。

### 明治三年(1870) 庚午 五十二歳

三月 槐南(七歳)入學。春濤「庚午三月十三日、兒泰上學、賦此以似」一首を詠う。

佐藤牧山、明倫堂督學となる。

九月 鱸松塘、淺草に「七曲吟社」を設立。『皇朝分類名家絶句』刊行。

九月十七日 春濤母没。



明治四年(1871) 辛未 五十二歳

春 『明治三十八家絶句』刊行。大槻磐谿、仙台から東京に移住。

五月廿八日 春濤の弟、一鳥次男渡邊精所没。

七月 廢藩置県。小野湖山、家督を譲って東京に出る。大沼枕山、「下谷吟社」を設立。

成島柳北、『柳橋新誌』二編を執筆。

秋頃 石井梧岡と唱和する。「次石井梧岡餞秋韻」一首を詠う。石井梧岡(1847~1904)。

名は彭、字は鑑期、希賢、通稱は榮三、梧岡は號。父は尾張藩醫師隆尊。幼少から學問を好み、春濤に詩を學ぶ。明治四年五等醫となり、その後愛知醫學校の教官などを務める。

明治五年(1872) 壬申 五十四歳

二月十三日(一説十四日) 妻国島清没。歌集に『庭すずめ』、また遺稿『古梅剩馥』がある。(東京移居後、春濤が『古梅剩馥』二冊を出版した。茉莉巷賣詩店發行書目に載る)春

濤「悼亡」一首、「夜涼聞笛」一首を詠い、亡妻を追悼する。

三月 清人金嘉徳歸国。

八月から十一月まで伊勢、西濃に遊ぶ。斎藤誠軒宅を訪れる。「八月廿七日茶磨山莊招飲

以片月、孤雲、白石、清泉為韻」絶句八首を詠う。斎藤誠軒(1826~1876)は齋藤拙堂(1797~1866)の長男。名は正格。字は致卿。通称は徳太郎、徳藏。父に學び、のち京都、攝津

などに遊學。伊勢津藩につかえ、藩校有造館の督學となる。著作に「誠軒集」。

また、『槐南集』卷二「讀陳雲伯『頤道堂集』」題記:「余幼時隨家君館美濃人戸倉竹圃

忱家者凡數月、有書肆以此集求售、家君將購之、以竹圃請、竟為其所得、家君乃攜『外集』

十卷歸。余初學詩、頗愛誦之。」戸倉竹圃養老山房に滞在中、春濤「冬夜雜詩」七律九首、

また「養老山房詩集題辭」戸倉竹圃囑「七律四首を詠う。

明治六年(1873) 癸酉 五十五歳

三月 岐阜に移住。「岐阜雜詩」二首、「長良渡觀桃」などを詠う。「岐阜雜詩」引:「癸

酉三月十四日移居岐阜、扁曰香魚水齋廬。東南對山、號九十九峰軒。北俯藍川、又號三十六灣書樓。貝原翁木曾路記稱岐阜風水似平安城者、不誣也。」

十月 岡本黃石らと交遊する。春濤次韻詩題「十月六日中秋片野、三浦、近藤諸子要子及

兒泰汎長良川賞月、適岡本黃石翁歸自北游、邀飲舟中、即追次梁先師中秋對月韻」とい

また、野村藤陰、春濤を訪ねる。春濤「野村藤陰見訪、賦此以贈」一首を詠う。

森春濤編『新歴謠』刊行。

明治七年(1874) 甲戌 五十六歳

一月 「元旦望金華山」を詠う。

三月 三月三十日(改二月十三日)先室國島女教師大祥忌、拉兒泰往哭墓「一首を詠う。

題註:「辛未十月十三日特命拜女教師墓、在名古屋圓盾寺。」

秋 金華山に登る。「秋日拉兒泰、姪民徳上金華山」一首、「登覽」一首を詠う。

五月 西郷従道、台湾へ出兵。

八月 全權辦理大臣として大久保利通が北京に赴いて清国政府と交渉する。

十月 川田甕江、「廻瀾社」を設立。北京專約調印。春濤 「大臣威武歌」を詠う。

十月二十七日 春濤、岐阜を發して東京に移る。出發前、「子將赴東京、次兒泰留別詩韻題

寓舍壁」一首を詠う。横田天風『明治の清新詩派森春濤先生』…「先生連年の不幸に遭遇

し、悲惋止むなく、名古屋永住の念亦漸く灰冷す、何ぞ其れ數奇の太甚しき。」又、「先

生明治七年十月十六日五十六歳の時、兒泰二郎氏(後に槐南と號す、文學博士と為る)筈

室伊藤氏を從へ、岐阜を發し、二十七日東京に着し、下谷摩利支天街に居を下す。即ち東

台の麓にして不忍池畔に近し、所謂茉莉巷凹是れなり。」春濤、枕山の家に近い下谷仲御

徒町(摩利支天横町)三丁目三十二番地に居を構え「茉莉吟社」を開く。

十二月 西郷従道歸國。春濤「都督凱旋歌」を詠う。

森春濤編『岐阜雜詩』刊行。

成島柳北著『柳橋新誌』初・二編刊行。

### 明治八年(1875) 乙亥五十七歳

一月 茉莉吟社集會。春濤「二月六日湖亭小集 分韻得虞」、「十六日湖亭小集次鷺津法官

韻」などを詠う。

三月 茉莉吟社例會。春濤「三月一日湖亭例集 分韻得文、乃詠春蘭」を詠う。

五月 森春濤編『東京才人絶句』二卷刊行。額田正三郎發行。卷頭に川田剛の序文ある。

七月 漢詩文雜誌『新文詩』第一集を編集。清人の葉燁と應酬。春濤「次葉松石春日雜興韻」、

「次葉松石見贈韻」などを詠う。葉燁(1839～1903)、字は松石、號は夢鷗。浙江嘉興の

人。

1874年(明治七年)に來日、東京開成學校の中國語教師となる。1876年(明治九年)歸國。

1880年(明治十三年)再び日本に赴く。京阪に遊歴、寓居。1882年(明治十五年)歸國。

著作に『扶桑驪唱集』、『煮藥漫抄』など。

小野湖山、大槻磐翁、松岡時敏らと酬唱する。「讀湖山翁蓮塘唱和集、次原韻 九首、「鶴

飼曲三首、次大槻磐翁韻」、「古原避災詞」八首などを詠む。

十一月 『新文詩』創刊。第一集刊行。

### 明治九年(1876) 丙子五十八歳

春 『新文詩・別集』第一號刊行。

四月 小野湖山手抄『文章游戲』二卷刊行。春濤「文章游戲題辭」一首を詠う。

五月 朝鮮修信使金綺秀入京。金綺秀撰『日東記遊』卷一「見倭皇于赤坂之宮、儀節一如

拜見我主上之禮。」春濤「同毅翁觀韓使」一首を詠う。

秋 清人葉燁歸國。春濤「送葉松石歸清國、疊其留別韻」四首を詠う。

十月 神風連の亂、秋月の亂、萩の亂が起こる。春濤「詠史」一首を詠う。

十一月 鷺津毅堂を訪う。十一月廿八日先師益齋鷺津先生忌辰、訪毅堂判事」一首を詠う。

### 明治十年(1877) 丁丑五十九歳

一月 成島柳北、『花月新誌』を創刊。のち春濤「讀花月新誌、疊韻四首贈成島柳北」四首を詠う。

丹羽花南、病を患う。「花南判事病中有與石埭唱和作、因次其韻」一首を和す。

二月 森春濤編『舊雨詩鈔』刊。

三月 西南の役。關澤霞庵、「夢草吟社」を開く。

九月 城山籠城戦。廿四日、西郷軍敗戦、西郷隆盛死ぬ。春濤「九月二十四日詠史」四首、

またその後、「九十月之交詠史」四首を作る。西郷軍を罵倒する。

### 明治十一年(1876) 戊寅 六十歳

春春濤「六十自贈」、「疊韻」、「再疊韻」、「三疊韻」計四首を詠う。また、「小湖新

柳詞」十首を詠う。清人沈文燮(字梅史)、王治本(號黍園)、王藩清(號琴仙)、春濤

宅を訪れる。春濤「清國沈梅史、王黍園琴仙昆仲過訪、借觀東豆花、飲湖上長醖亭、分得

長字」一首を詠う。

三月 二十日、丹羽花南没(1846)。

四月 春濤「四月二日六十生辰、疊韻贈」二首を詠う。關三編『明治十家絶句』刊行。

五月 下谷仲徒町三丁目七十一番地に移居。八日、「移居疊用自贈韻」二首を詠う。

六月 十三日 大槻蟻給没(1801)。

秋 清人王藩清歸國。春濤「送王琴仙還清國、兼寄懷金爾懷、葉松石二子」一首を贈る。清

國公使何如璋、突然春濤を訪ねる。春濤「清國欽差大臣何公突如來如、驚喜曷勝、賦一絶

句以謝」を詠う。

神波即山、東京本郷龍ヶ岡の自宅に「龍邱吟社」を興す。

向山黄村、「晚翠吟社」を設立。

九月 梁川星巖廿一年忌辰。春濤「遙奠星巖先生墓、用如意山人韻」二首を詠う。題記「戊

寅九月二日實先生二十一年忌辰也、舊社諸子相謀修祭其墓、魯直在東京、不能與焉、聊獻

蔬酒之資、附以此詩。」

秋 葉燁、吳氏を娶る。春濤「善因緣歌、遙賀葉松石新娶」を贈る。

十月 森春濤編『清廿四家詩』刊行。

十二月 森春濤編『清三家絶句』刊行。

### 明治十二年(1877) 己卯 六十一歳

一月 「己卯新正六十一自祝」三首を詠う。

三月 二十九日、梁川紅蘭没(1804)。

四月 「四月二日六十一生辰自祝」一首を詠う。三條實美(1837~1891)に招かれる。春濤

「梨堂相公對鷗莊雅集、席上恭賦奉呈」一首、「又以遠鷗浮水靜輕燕受風斜為韻賦十首

を詠う。

夏 伊香保に遊ぶ。

### 明治十三年(1878) 庚辰 六十二歳

浅見綾川編『東京十才子詩』刊行。小川棟宇編『正續近世名家文鈔』刊行。

二月 清人楊守敬が来日し漢魏六朝金石書道を紹介、日下部鳴鶴、巖谷一六、松田雪柯ら、これを學ぶ。

三月 「詩魔自詠」八首を詠う。詩引! 「點頭如來目予為詩魔、昔者王常宗以文妖目楊鐵崖、蓋以有竹枝種墮等作也。予亦喜香墮竹枝者。他日得文妖詩魔竝稱、則一生情願了矣。若夫秀師呵責、固所不辭也。」

五月 三條公の宴に招かれる。春濤 「五月九日陪梨堂相公醺於煙霞深處、席上賦呈」四首を詠う。

葉燾、日本に戻る。春濤 「葉松石在西京、見寄一律、次韻代贈」を詠う。

十二月 森槐南、大蔵官俣各務省三の娘幾保を娶る。

### 明治十四年(1881) 辛巳 六十三歳

二月 橋本蓉塘著『蓉塘詩鈔』二巻刊行。翫古齋蔵板。春濤 「蓉塘詩鈔題辭」四首を贈る。

夏 善光寺、上田に遊ぶ。「善光寺雜詩」五首、「上田雜詞」二首を詠う。

七月三日 村瀬太乙没(1803)。

七月から歳晩まで新潟に遊ぶ。出發前、「辛巳七月將遊新潟、賦此留別東京諸同好」一首、また「疊韻」一首を詠う。旅中、「新潟竹枝」五十四首の風物詩を詠う。

十月 『新潟竹枝』刊行。森槐南、太政官出仕。森槐南編『春濤詩鈔甲籤』四巻二冊刊行。扉に「東京茉莉菴凹處發客」とあり。扉裏に「明治十四年肇秋刻于東京三季堂」とあり。

版心に「三季堂存版」とあり。出版人森泰一郎。

### 明治十五年(1882) 壬午 六十四歳

一月 岡本黄石、東京麹町平川町に轉居。

三月 黄遵憲、サンフランシスコ總領事へと轉任し、日本を離れる。春濤 「送黃吟梅轉任桑港領事赴美國」詩を贈る。

「對鷗莊雅集、以柳塘春水漫花塢夕陽遲為韻十首」を詠う。

春 千葉八鶴湖に遊歴。「千葉竹枝」五首、「遊八鶴湖用梁川星巖先生原韻」三首を詠う。

八月 群馬に遊歴。「香山八勝」八首、「香山賞心十六事」十六首、「香山坐湯舘」五首などを詠う。

十月五日 鷺津毅堂没(1825)。

谷橋編『明治百二十家絶句』刊行。

### 明治十六年(1883) 癸未 六十五歳

一月 「次湖山翁七十自祝詩韻」二首を詠う。

五月 東京發して甲府に遊ぶ。「峽中雜吟」五首、「甲斐八景」八首、「甲府留別次歸雲送別韻」などを詠う。

七月 甲府を去り身延山に父の追善を行う。

九月 一宮に歸る。この時土川弥七郎(初代一宮町長、號壽昌堂)宅で舊友等により盛大

な歓迎會が催される。「還郷」一首を詠う。

十月 岡本黄石、東京麹町平川町に「麹坊吟社」を開く。春濤「十月二十一日亡妹小祥忌、追悼有作」一首、「掃墓」三首を詠う。

十二月 岐阜に遊ぶ。「十二月六日岐阜大雪、題十八樓用東城北臺韻」二首、「二十八日依寓古市場村國島西圃宅」一首などを詠う。

### 明治十七年(1884) 甲申 六十六歳

一月 國島西圃宅に滞在。「甲申新年」一首を詠う。『新文詩』第百集刊行。停刊。漢詩雑誌『鳳文會誌』創刊。

二月十二日 春濤、岐阜國島宅で亡妻十三回忌をいとむ。「十二日先室十三回忌辰」一首を詠う。また、大垣の小原氏に招かれ、長浜、彦根をへて京都に入り、南禪寺の梁川星巖の墓に謁する。その後中国地方漫遊の途に上り、年末に東京に歸る。旅中、「多景色樓新題十詠」などの風物詩を詠う。

十月廿九日、『新文詩別集』第十八號刊行。

十一月三十日 成島柳北没(1837-)。

### 明治十八年(1885) 乙酉 六十七歳

五月 『新新文詩』發刊。第一集刊行。

六月 白鷗社集會。春濤「六月十八日白鷗社諸子招集同盟、追弔柳北仙史、乃賦以奠」一首

を詠う。

### 明治十九年(1886) 丙戌 六十八歳

一月 森川竹蹊、藤沢竹所、篠山柳園と共に「鷗夢吟社」を設立し、「鷗夢新誌」を發行。春濤「和次湖山翁七十三原韻」五首を詠う。

春 「柳橋柳枝詞」四首、「文部大臣森公招致都下名流、為其尊人鶴陰先生八秩壽、恭賦此奉和」二首、「神波即山移居有詩次韻」一首などを詠う。

十月 『新新文詩』第十七集刊行。

十月から翌年九月まで南海漫遊の途に上る。『南海游覽集』を編む。

十二月 『東洋學會雜誌』創刊。

坪内逍遙著『小説神髓』刊行。

### 明治二十年(1887) 丁亥 六十九歳

「徳島留別」六首、「笠藏山新題」二十四詠、「琴平新撰十二題」など數多くの風物詩を作る。

十月 東奥に遊ぶ。「遊仙十一首、遊仙臺覽松島作」などを詠う。

### 明治二十一年(1888) 戊子 七十歳

一月 「七十自述」二首を詠う。

四月 伊藤博文(1841~1909)首相の夏島別荘に招かれる。

初夏 伊藤公と唱和する。「春歌相公夏島別業以春水船如天上坐、夕陽人在畫中行爲韻、同

黄石、甕江、古梅、鳴鶴、即山、錦山賦」十四首、「陪春歌相公金澤觀牡丹」一首、「夏

島別業分韻得山字」一首を詠う。

十月 春濤 瘡が癒える。「十月十三日宿痾告退、月下内集、對酒成詠」、「小遊仙詞效曹

唐體作假藥名詩」五首を詠う。『老春瘡後集』を編む。

### 明治二十二年(1889) 己丑 七十一歳

小野湖山、京都に「優遊吟社」を設立。

槐南、名古屋の母の墓参を行う。

七月八日 頼支峰没(823)。

秋 「秋日雜感」二首、「秋人」、「秋海棠」、「秋雨」、「秋雨歎」二首、「秋月」、「

「秋風」、「秋雨」など秋をテーマにした作品を詠う。

十一月二十一日、春濤没(1819)。遺作「絶句」一首：「七十一年一夢非、茶煙禪榻倚

斜暉。兒曹若問三生世、蝴蝶花前蝴蝶飛。」日暮里經王寺に葬る。後、春濤と國島清子の

墓は日暮里經王寺より府中にある多磨靈園に移る。埋葬場所は「區」種、側、番。

### 明治三十八年(1905) 乙巳 没後十七年

阪本鈺校字『三國港竹枝詞』出版。卷末に森槐南の志、清人王治本の跋文がある。

### 明治四十四年(1911) 辛亥 没後二十三年

三月七日 森槐南没。享年四十九歳。明治四十二年(1909)ハルピンでの安重根による伊

藤狙撃の際に同行して被弾、その傷がもとで死去。青山墓地に葬る。後、多磨靈園へ

改葬。親子同墓域に肩を並べる。

### 明治四十五年(1912) 壬子 没後二十四年

五月八日 女婿の森川竹蹊により『春濤詩鈔』出版される。森川鍵「春濤詩鈔・識」…「岳

丈春濤先生『詩鈔』二十卷。其首四卷、自『三十六灣集』至『絲雨殘梅集』、既經先生手

定、題為「甲籤」。生前上梓、久行於世、而未及其他。令嗣槐南先生有續刻之志、亦未果

而逝矣。於是親舊囑余卒其業。余既有瓜葛之親、義不可辭。乃就遺藁而鈔録、嗣成十六卷。

每集小名既存之、自『林下柴間集』至『老春瘡後集』是也。前四卷一依其舊、絶無所變更。」

### 大正四年(1915) 乙卯 没後二十七年

五月十日 春濤四番目の妻伊藤織緒没。

### 昭和八年(1933) 癸酉 没後四十五年

十月六日 槐南の妻各務氏没。

昭和十六年(1941) 辛巳 没後五十二年

三月 森徳一郎編『一宮雜詩』刊行。大成社印刷。所收の詩集は『三十六灣集』(自癸巳三月至乙未七月)至『詩酒逢迎集』(癸未九月至臘月)。

昭和四十二年(1968) 戊申 没後八十年

生誕百五十年・没後八十年を記念して、「一宮の宅址碑」建つ。

昭和五十二年(1978) 戊午 没後九十年

生誕百六十年・没後九十年を記念して、中部日本書道會一宮支部主催で「森春濤展」を行う。

昭和五十五年(1980) 庚申 没後九十二年

三月 後藤利光著『森春濤詩抄』刊行。一宮史談會出版。

平成十六年(2004) 甲申 没後一百一十六年

三月二十六日 入谷仙介 揖斐高校注『春濤詩鈔』(選集)出版される。

#### 主要参考文献

森槐南編校『春濤詩鈔甲籤』四卷、明治十四年東京三季堂刊行、一橋大學附屬圖書館藏本。

森川鍵藏編『春濤詩鈔』二十卷、明治四十五年東京文會堂刊行、名古屋大學文學部藏本。

横田天風著「明治の清新詩派森春濤先生」(一～四)、『東洋文化』第二十八～四十一號、昭和二年六月～九月。

今關天彰著「森春濤(上、下)」、『雅文』第三十五号・三十六号、昭和三十三年二月・三十三年四月。

西成編『一宮市史』、一宮市教育委員會刊行、一九五三年九月。

岐阜市編『岐阜市史』、一九七六年三月～一九八一年十一月。

一宮市博物館編『森春濤とゆかりの詩人展』、昭和六十三年九月。

一宮市博物館編『明治の文雅——森春濤をめぐる漢詩人たち』、平成十四年七月。

前田愛著『幕末・維新期の文字・成島柳北』、『前田愛著作集』第1巻、筑摩書房、一九八九年三月。

三浦叶著『明治漢文學史』、汲古書院、一九九八年六月。

木下彪著「明治詩話」、紀田順一郎編『近代世相風俗誌集』八、クレス出版、二〇〇六年一月。

日野俊彦著『森春濤の基礎的研究』、汲古書院、二〇一三年三月。